

# 出来事ファイル (No.23-9)

## ■開港5都市 景観まちづくり会議 函館大会

日本最初の開港港である5都市(函館、横浜、神戸、長崎、新潟)が持ち回りで毎年開催しており、今年『函館』で開催!

元町商店街まちなみ委員会・栄町通まちづくり委員会からも参加し、9月9日(土)から11日(月)までの3日間、各都市の市民団体や行政と交流を深めながら、景観・歴史・文化・環境などの課題や将来について、活発な意見交換を実施しました。

来年は横浜にて開催される予定です。



全体会議の様子(トークセッション)



トークセッションに登壇する  
栄町通まちづくり委員会委員長 佐田野さん

## ■もとまちハーバークリーン作戦

9月6日(水)正午12時から、曇天の中エスタシオン・デ・神戸のみなさんが、D51周辺のクリーン作戦を実施しました。(10月29日(日)D51まつり開催)



栄町通まちづくり委員会は、9月8日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(石倉デザイン)石倉伸吾、(株)KKテクノ)松本美紀・中村圭遥・(神戸市都市局景観政策課)西尾俊広、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(佐野運輸)入山隆寛・北島幸宏、(神明倉庫)藤尾憲弘・十時実希、(兵庫県信用組合)西海由希子・皆川裕希・藤本吉英・井上博仁・常深雅子・小林洋文、(広島銀行)橋田英秀、(三鈴マシナリー)稲岡千硯・錦織彬子、(新光明館)中川俊・西村友博・大森貴美子、(佐田野不動産)佐田野宏之以上、22名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



## □読者プレゼント

観覧ご希望の方は、展覧会名と、あなたの住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添えて、本紙編集部までハガキでお申込み下さい。先着順で、2名の方にペア招待券をお送りします。

## ◎開館60周年記念 「京都画壇の青春一栖鳳、松園につづく新世代たち」

開館60周年を記念する本展では、明治末から昭和初めにかけて、京都画壇の画家たちが一丸となり、迷い、もがいた時代の、時に荒ぶり、過剰で、愛おしい作品を堪能いただけます。

会場：京都国立近代美術館  
会期：2023年10月13日(金)～12月10日(日)  
休館日：月曜日  
時間：午前10時～午後6時、金曜日は午後8時まで(入館は閉館30分前まで)



上村松園(舞仕度)1914年  
京都国立近代美術館



BANKSY(Girl With Balloon)2004年 Photo by © MUCA / wunderland media

## ◎MUCA展 ICONS of Urban Art ～バンクシーからカウズまで～

世界的な活躍を見せるバンクシー、カウズ、バリー・マッギーなど、10名の作家にスポットを当て、日本初公開の作品を含む、約70点を紹介します。

会場：京都市京セラ美術館 新館 東山キューブ (京都市左京区岡崎門勝寺町124)  
会期：2023年10月20日(金)～2024年1月8日(月・祝)  
休館日：月曜日(祝日の場合は開館)  
年末年始(2023年12月28日～2024年1月2日)  
開館時間：午前10時～18時(最終入場17時30分)

## ◎ひょうご五国のやきもの

兵庫県立歴史博物館(姫路市本町68番地)では、開館40周年記念企画展「ひょうご五国のやきもの」展を開催します。ひょうご五国(摂津、播磨、但馬、丹波、淡路)の各地で受け継がれてきた当館のコレクションを中心に紹介します。



眼平焼 赤絵海老文茶碗  
江戸時代後期 兵庫県立歴史博物館蔵

会場：兵庫県立歴史博物館  
会期：令和5年9月23日(土)～11月26日(日)  
休館日：月曜日(祝日の場合は開催)  
時間：10時～17時(入館は16時30分まで)

# みなと元町 TOWN NEWS



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

## 開港5都市 景観まちづくり会議 函館大会に参加して

合資会社ゼンクリエイト 根津 昌彦



大会旗を囲んで参加者みんなで記念撮影(函館大会2023のホームページより転載)

2020年秋の開港5都市景観まちづくり会議神戸大会で、FG会議(Future Generation)会議のコーディネートをした際に約束した「今後4年間は各都市で開催される開港5都市会議に参加します!」という宣言を守るべく、9月9日～11日の3日間の会期で開催された函館大会に「もとまちハーバー懇談会」を代表して参加してまいりました。北海道には、叔父が住んでいたこともあって幼少の頃1回と、妹の結婚式で1回の2回訪れたことはあったのですが、今回の函館は初訪問でして、仕事半分、初めての地への旅行気分半分で、伊丹空港からの直行便で函館空港に降り立ちました。

昨年の新潟大会の交流会の一場面、ぜひとも参加者で議論する時間をたくさん設けてほしいという要望を函館市役所の担当者にお伝えしていたのが、反映されてかどうかはわかりませんが、各プログラムで積極的に参加者による対話・討議の時間を設定してくださって、「会議」という冠にふさわしい大会だったなあとまずは思ったところです。

初日の全体会議Iでのトークセッションでは各都市からまちづくりの課題になっていることを披露しあいながら、他都市でもある共通の悩みや具体的な解決に向けた取り組みなどを披露しあった後、五稜郭を舞台に毎年繰り広げられている「市民創作函館野外劇」の特別公演「星の城、明日に輝け」を鑑賞し、函館の街の歴史を学ばせていただきました。

夜は恒例のウェルカムパーティーに参加し、各都市の方々と円卓を囲んで、函館の

自慢の食材と新潟から差し入れていただいた日本酒に舌鼓を打ち話の華を咲かせたあとに、神戸からの参加メンバー有志で、函館空港から市街地に向かうタクシーの運転手さんに教えていただいた観光客があんまり訪れない地元の人がよく足を運ぶ海鮮居酒屋「次郎」へ移動。

地元でとれた新鮮なニシン・ホタテ貝・牡蠣・タコを堪能しました。あれ?函館って「活イカ」が有名じゃなかったっけ?を思われた方は、函館通ですね。実は、函館では「魚種転換」というかつてなかった深刻な問題にいま直面しているのです。地球温暖化の影響で海水温が以前に比べて上昇してしまった結果、これまで当たり前に獲れていたイカの漁獲量がこの10年で10分の1以下になってしまったとのこと。函館一番の繁華街である五稜郭周辺などの居酒屋さんの前にも「活イカ」という看板や幟は上がっているが、入口には「今日は活イカは入荷していません」の言葉が並ぶという異常事態で、それは函館朝市でも同じ光景が見られました。

イカに換わって爆発的に漁獲高が伸びている魚が「ブリ」。この10年間で30倍以上も水揚げされるようになり全国第一位にまで上り詰めたものの、函館の家庭の食卓では全く馴染みのない魚だとか。南の海で上がるブリに比べて脂の乗りが少なくあっさりしていて、何とかおいしく食べる方法は無いものかと立ち上がったプロジェクトが、「北海道ブリリアントアクション」。大会2日



お昼にいただいた函館ブリ塩ラーメン

目を実施された8つの分科会の1つ、第7分科会『函館の自然と新たな名物「ブリ」を満喫～函館山&函館公園散策～』

に参加した私は、この取り組みの事務局の方から、函館ブリたれカツ、函館ブリ塩ラーメンという2つの食べ方がベストマッチであることを直接伺い、函館山を登り終えて腹ペコだったお腹を大いに満たしてくれたのでした。

分科会を終えた後、夕方からは全体会議IIが旧函館区公会堂で行われました。函館の街のジオラマ作成を行った北海道函館工業高等学校による発表の後、各都市FGメンバーがファシリテーターとなり、「持続可能な景観まちづくり」をテーマに、①景観(夜景、伝統的建造物など)、②歴史・文化(歴史のストーリー、食など)、③環境(海洋ごみ、森林伐採など)、④交通(バスなど公共交通の利便性向上など)⑤経済(買い物難民、商店街の衰退など)、⑥人材育成(担い手不足、若年層の流出など)、⑦福祉(多様性)(バリアフリー、性的マイノリティ、誰でもトイレなど)、⑧情報技術、情報システム(SNSによる発信、IT産業の振興など)、⑨港(港の活用など)の視点で、グループ討議を行いました。短い時間でしたが、各視点ごとに今後の課題解決に向けたキャッチコピーを提案するスタイルでのまとめは、なかなか興味深いものでしたので、その報告はまた別稿にて紹介できればと思います。

開港5都市会議が語る景観は、「広義の景観」の景観であるということ、つまり、私が神戸大会FG会議のまとめとした「人が歩いていること、佇んでいること、営みが目に見えることでまちが生きているということ」を皆さんが実感することそのものが都市の景観であることが再確認できたとても心地よい大会で、大満足で帰路に就くことができました。



函館山山頂展望広場から市街地を望んでパシャリ(函館大会2023のホームページより転載)



## 海という名の本屋が消えた (119)

平野義昌

## 西村旅館(11)

「朝日新聞」(2023.8.11)の戦争特集(残響78年後の「戦争」)は太平洋戦争後の日本人兵士戦犯裁判を取材。フィリピンは日米激戦地、同国民の犠牲者は111万人にのぼる。戦後フィリピンの裁判で日本兵137名が民間人殺害や性暴力などの罪で有罪、半数が死刑判決を受けた(17名執行)。エルピディオ・キノ大統領は妻子4名を日本軍に殺害されていた。1953(昭和28)年7月、その大統領が全戦犯の減刑・特赦を発表した。

〈私は妻と3人の子を殺された者として日本人を恩赦する最後の一人となるだろう。私は自分の子孫や国民に、我々の友となる日本人への憎悪の念を残さないために、この措置を講じるのだ。〉註1

大統領は個人の恨みを越えて赦しを選んだ。東西冷戦下の東アジア情勢や対日賠償交渉など「政治的判断」もあった。同時に敬虔なキリスト教徒として、「友好を深めるだけでなく、フィリピンに強い犠牲に対する責任の自覚を日本に期待するものでもあった」註1

2016(平成28)年1月、昭仁天皇・美智子皇后がフィリピンを訪問し、戦争犠牲者に感謝と追悼の意を述べた。皇后の歌がモンテンルパの博物館に展示されている。

〈許し得ぬを／許せし人の／名と共に／モンテンルパを／心に刻む〉註1

同じく「朝日新聞」(8.16)〈ひと〉欄が本年7月フィリピンの戦犯恩赦70年記念の式典で講演した加納佳世子を紹介。父が同郷の死刑囚のためにキノ大統領に助命嘆願の書簡を送り続けた。2011(平成23)年にマニラの博物館所蔵の大統領文書から書簡が発見され、大統領の親族と交流が始まった。加納はなぜ恩赦を未来に伝えるのかを問われて、「赦しから何を学べるかを考え、行動することが大切だからです」と答える。註2

モンテンルパ収容者のなかに川口清健(きよたけ、元陸軍少将)という人物がいた。前に西村貫一の経歴を神戸小、関西学院から麻布中学に転校と紹介したが、神戸小卒業後、陸軍幼年学校を目指す大阪偕行社付属小学校高等部に在籍、中退した。川口と同級で、その後も交流。戦争中、川口は中国や南洋戦線で部隊を率いた。1946(昭和21)年、川口も戦犯容疑で収監された。貫一は慰問品を送り、激励。「戦争に敗れたか、太陽と空気と水とはなんぼでも受けることが出来るのやから何も心配せんかてよろしい」(註3)。川口は極刑を免れ、巣鴨刑務所に移された後、53(昭和28)年釈放となった。へちま会員に名を連ね、貫一と親交を回復した。

49(昭和24)年、モンテンルパに戦犯教誨師・加賀尾秀忍(しゅうにん、真言宗僧侶)が赴任。加賀尾は任期が終了しても自費で滞在し、戦犯たちに寄り添い、14名の処刑に立ち会った。加賀尾は受刑者らと詩歌集「独房」(昭和25年8月号、12月号)と「虜囚」(昭和25年10月号～昭和27年7月号まで不定期、全11冊)を作成。死刑執行を待ち、戦友を偲び、故郷の家族を憶う詩歌が並ぶ。

〈思はじと思へば思ふ亡友(とも)のこと焼きつく胸に涙し流る〉

〈我が心知るや知らずや親友五人手に手をとりにて先に逝くとは〉註4

歌手・渡辺はま子(1910～1999年)は慰問中の天津で終戦を迎え、1年間捕虜収容所で過ごした。52(昭和27)年1月、来日したフィリピン国

会議員から日本人戦犯のことを聴き、収容所にお香を送った。同年6月、加賀尾は戦犯作詞・作曲の楽譜を渡辺に送る。渡辺はすぐにビクターに持ち込みレコード化。「ああモンテンルパの夜は更けて」(作詞・代田銀太郎、作曲・伊藤正康、歌唱・渡辺はま子、宇都美清)はベストセラーとなった。この歌によって戦犯問題が国民に知られ、500万人に及ぶ助命嘆願書が集まった。海外渡航はまだ困難だったが、12月渡辺のフィリピン慰問が実現、戦犯たちの前で歌唱した。〈モンテンルパの夜は更けて／つもの思いにやるせない／遠い故郷しのびつつ／涙に曇る月影に／優しい母の夢を見る〉註5

53(昭和28)年6月、加賀尾は大統領に面会を許された。同曲のオルゴールを聴いてもらい、曲の説明をして、戦犯特赦を願った。

57(昭和32)年11月、加賀尾は川口に紹介され貫一を訪問、へちまクラブで講演した。「独房」「虜囚」を見せたところ、貫一は感激して印刷と配布を申し出た。加賀尾は「うたではなくてうたのようなもの」(註4)だから、と遠慮した。貫一は、戦犯の真剣な告白で貴重なもの、失われては大変、是非出版を、と提案した。寄稿者全36名はすべてペンネーム、本名がわかるのは26名である。

出版は貫一の文化事業の一環。本稿では家業の歴史、ゴルフ文献、古書愛好の一部を紹介してきた。ここからは貫一の「愛書趣味」について時間を遡る。1915(大正4)年にマサと結婚して、17(大正6)年西灘村に別宅を構えた。欧風の庭をつくり、西洋の古家具を買い集め、名画を飾り、友人とレコード鑑賞。〈座が温ると古本あざりがはじまった。書齋の机の上にはうづ高く積まれた書籍の蔭で二日も三日も何かペンを走らせているKをよく見るようになった。(中略、本をめぐって夫人と口論)しかし、読書はKを十全に満足させるものではなかった。Kは上京して美術雑誌発行の計画を水谷(引用者註、水谷鐵也、みずのや、彫刻家)にはかった。／「そんな計画はやめといた方がよい」とすげない返事に彼はひどく憤慨していたが、誰も知らない間に「アンティーク」と誌名のついた美術文芸誌が独自に発行されていた。ボルボードル仏跡の研究家頼川良平(引用者註、貫一『年譜』では「君平」)や其の他の同人達の執筆で立派な雑誌が数年の間神戸で編輯されていったことはこの港町では稀有の事である。〉註6

1918～19(大正7～8)年、神戸で雑誌「アンティーク」が発行された。宮崎収二郎の兵庫文学史にも言及がない雑誌である。この創刊号がいきなり発禁になった。貫一執筆「アダローザ」が原因。よって第二号からしか読めない。

水谷鐵也「吾人作家の希望」、貫一「感想」、一紅女「追憶から」、貫一「五月蝸い豚奴」、貫一「若いARTISTの群れに」、吉田菱「不安と恐怖のかなたに向って」、貫一「男」、貫一「VICTORIA STATION」、村上豊「折にふれ」、多田寅之助「陸奥物語――脚本」、黒風白雨楼主人「編輯妄語」。表紙はイタリア中世の画家ジョットの作品。大正七年七月一日発行。編輯発行人・多田。発行所・アンティーク社(神戸市栄町三丁目四十三番地)。発売所・大阪實文館神戸支店(神戸市元町五丁目三番屋敷)。25銭。註7 執筆者たちのことはほとんど不明。「編輯妄語」が創刊号発禁を語る。まず、誤字脱字が多かったことを詫げる。発禁問題について、世人の好奇心をそそって自己の思想を誇るものでは

ない、と断わる。「アダローザ」は西洋美術の裸体美を論じたものと思われる。

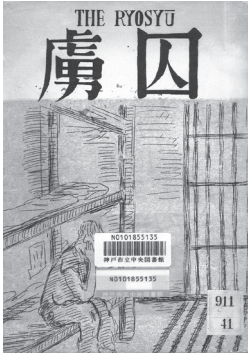
第三号は「八月號1918」の表示(大正七年八月一日発行)。貫一は戯曲「姉」他、「感想」「ロシアでの或る日」寄稿。「感想」は読書随筆。〈自分はWifeに対して近頃大変に喜ばねばならない事がある。それは自分が一人本を読んで居るか、感想でも書いて居る時には、自分一人静かにおいてくれる事である。〉註8

読書も執筆も一人静かに集中したい。しかしながら、書いたものは他人に読んで聞かせたい。そして、批評がほしい。自分の成長のため、自分を知るため。わがままである。

「ロシア」は欧州旅行中の悲話。ワルシャワ駅で日本の玩具を売る少年に出会う。日本人らしいが、日本語を話さない。貫一はカバンに入るだけ買ってやり、事情を聴く。暴力に支配され働かされている。助け出して日本に連れ帰ろうと思うが、少年は拒む。貫一は金を手渡すのみだった。「編輯妄語」(貫一)名。世間は、創刊号で止める。2,3号続けば上々、紙質が良くないなど、いろいろ批評する。〈神戸に美術や文学に関する雑誌が二つや三つはあっても好いと思う。その現出することを各々同人は大なる喜びを以て待つて居る、そして出来れば何かの形式で御役に立つ事があれば、やっても好いと思う。〉註8

同じく「編輯妄語」(豊)名が7月25日開催の慈善音楽会を報告。神戸基督教青年会に慶應マンドリン倶楽部を招いた。〈神戸の人が近来甚だしく音楽に目醒めて来たのは悦ばしい傾きである。(中略)少しも深味のない生活を重ねて居る人でも、精神の労苦と肉体の疲労とを一曲の音楽に依ってどれだけ緩和されるものか知れない。〉註8 収益は同青年会に寄付。以前貫一がマンドリンクラブを結成したことは記した。具体的な活動は不明だったが、一端が判明した。

註1 「朝日新聞」2023.8.11  
 註2 「朝日新聞」2023.8.15  
 註3 川口清健「旧友」(『へちまと十年』へちまクラブ、1956年)  
 註4 加賀尾秀忍編「虜囚」(へちまくらぶ 1956年)。写真、神戸市立中央図書館蔵書。  
 註5 Web「二本紘三のうた物語」  
[https://duarbo.air-nifty.com/songs/2007/01/post\\_5fde.html](https://duarbo.air-nifty.com/songs/2007/01/post_5fde.html)  
 Web「ああ、モンテンルパの夜は更けて 解説」  
<http://www13.big.or.jp/~sparrow/MIDI-montenlupa-exp.html>  
 註6 リヒアルト・ケー・ライフ「Kの田園生活」(発明家、正体不明。『へちまと十年』所収)  
 註7 「アンティーク 第貳號」アンティーク社、1918年  
 註8 「アンティーク 八月號」同上  
 7.8は国立国会図書館デジタルコレクションより。引用文は適宜新字新かなに直した。



## みなとMIO MACH ケンチクさんぽ vol.27

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

## 乙仲通り周辺を歩いてみた

私の人生のなかで、神戸・元町に来ることはそんなに多くなく、奈良出身で京都や大阪には向くけど、ある程度大人になってからは大阪中心の生活、神戸は精神的にも遠いところでした。そんな私が元町周辺にご縁があったのは、元町の海岸ビルヂングにある設計事務所でアルバイトをした時です。

大阪から兵庫の加古川に移り住むことになり、どこもかしこも見知らぬ場所で、ついでに神戸もという感じで、昼休みに周辺をウロウロしていました。そこが実は乙仲通り近辺だったのは後に知ったことです。

普段は日差しや雨を避けて目的地までアーケードのある商店街をつい歩いてしまうのですが、この度は原稿を依頼されたことと懐かしさもあり、このニュースを読んでいる方はみなさんよくご存じとは思いますが、南京町・栄町・乙仲通りを中心に路地にも時折り吸い込まれながら、気の向くままに歩いてみました。

J R 元町駅を出て信号を渡り、元町商店街を抜け路地を通りながら、南京町へやっ



ご存じ栄町ビルディング

足元をおしゃれに

小さなお気に入りの台湾料理屋さんは無くなっていました。週3通ったお店でしたが残念。ここだったかな、こっちだったかも?、残っているこの建物だったかも?と探して歩きました。当時は近くの道路で工事をしていると店内が振動で揺れていたのを思い出します。そういった、古くてある意味壊れそうな(失礼)線の細い建物を、DIY的にラフに設えを施し自店の商品を飾ったりして、この建物で商いをすること自体が店主自身や扱う商品を表しているように思えます。バタバタと塗ったペンキも、配管が外に見えていても、それすらも味と思わせてくれます。

一方、平成や昭和後期に建ったであろう一般的なRCのビルやマンション1階にも、感じよくわざとラフに仕上げているのでしょう、乙仲通りや元町の雰囲気にも馴染んでいるお店もあります。見上げると「普通の」建物やん。でも、こういうお店が集まっていて、そこに人が集まる、これこそが地域の持つ

てきました。まずは大好きな中華でお昼ご飯でもと思ったのですが、コロナ禍以降戻ってきた観光客の熱気と、店先に出ている揚げ物油の匂いにやや気圧されながら、早々に西へ通り抜けました。

地図によると「元町パークロード」とある縦の道を海側へ。(ここはアルバイト先への通勤路、毎日歩いた道です。)栄町通りやちょっと大きな通りには専通りマンションが多くなっています。今回改めて歩いてみて思ったのは、こんな素直な街に住みたい人は多いだろうなという事です(古き良き小さな建物がなくなってしまうのは悲しいのですが、マンションが売れるのも頷ける。)。ただ単に綺麗だとか高級感があるとかでなく、手頃な感じでここにしかない味のあるものがあって、雑貨や食料含め日常の「買いもん」ができるお店もちょっと歩けばあるし、私も機会があれば住んでみたいかも!と思いました。

栄町通りを渡ると、雰囲気のある古いビルが見えてきました。栄町通りと乙仲通りの間にある東西の細い道、ここは大きな通りに面した側の敷地は、マンションや会社ビルの裏側というだけになってしまっていますが、中規模や小規模で残っているビルの

1階にはこちら辺特有の感じの良い小店舗が入っています。たまにTHE昭和なお店も残っていて、頑張っしてほしいものです。



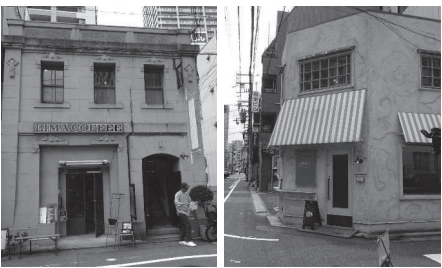
アリアンスタグラフィック 海岸ビルヂング正面

たしか海岸ビルヂングの1階にカフェがあったよな、まだあるかなと思いつを進める途中、その手前は新しい建物に変わっていて、そこから海岸ビルヂングはまだ見えず、街の独特の雰囲気も途切れてしまっていました。知らなければ、もうこの雰囲気はこら辺りで終わりかな?と引き返してしまうかもと思いつながら、そのまま進むとありました。アリアンスタグラフィック。やっぱり町並み、店舗の繋がりって大事ですね。以前に何があったのかは思い出せませんが、もう少し街の雰囲気に繋がりがあったような。。



お店が色々

たコーヒーストッに入り、アイスコーヒードで休憩、若い店員さんから勝手に元気を分けてもらい満足、また西日に照らされながらウロウロ。高砂の会社が出しているソフトクリームやさんで涼をとろうか思案しながら、今日の散歩は終わりにする事にします。



リマコーヒー

尾瀬くみ (おせくみ)  
 尾瀬耕司・くみ建築事務所代表  
 一級建築士/JIA会員  
 住宅・店舗を中心に、新築・古い建物のリノベーション等を手掛ける